パラグラフ･ライティング②

Ⅰ. 情景等を描写する

たとえ何かを「あるがままに描写する」場合であっても、文章化している以上は必ずその描写には目的がある。従って、まず「何のためにその情景（等）を描写するのか」を明確にする必要がある。

続いて、その目的を達成するためには「何を描写するのが最も効果的か」を考えることになる。つまり「あるがままに描写する」にしても、筆者の選択が極めて重要ということである。

さらに、そうして選び出された部分部分を、「どの順番で描写するのが最も効果的か」を考慮して配列する。「大→小」や「手前→奥」など、読み手が順を追って想像できるようにする（負担を最小限にとどめる）のが原則だが、狙った効果によってはそれを乱すこともありうる。むろん、読み手に分かりにくくなるならば、これは避けたほうがよい。

Ⅱ. 描写を目的とした段落の話題文

描写しようとする対象を、書き手がどう捉えているかを明示するのが原則である。従って、「何が（topic）」「どのようであるか（controlling idea）」が一般的な形となる。例えば説明的な話題文「私の部屋は日差しのよく入る明るい部屋だ」や、印象を優先した話題文「キャンパスで一番好きなのは、図書館四階の一隅である」などが考えられる。

また、無味乾燥ではあるが「その建物の様子は次のようなものであった」も話題文となりうる。「採りあげていることを示すだけ」の文章は本来話題文とはいえないが、描写や説明に限っていえば、それのみが目的の段落もありうるからである。

Ⅲ. 過程を説明する

まず説明の目的を考えるのは描写の場合と同様である。

続いて、説明のために一連の過程を任意の単位に分割する。どのように分ければよいかは目的に照らして書き手が慎重に決定する。

さらに、分割された単位を最も効果の高い形で配列する。単純に「始め→終わり」に並べられるものからそうでないものまで様々なケースが考えられる。

Ⅳ. 過程説明が必要とされる場面

ある製品の取扱説明書など、実際に何かの動きや仕組みを説明する場合にはもちろん過程説明が必要になる。この場合、配列は「順を追って」ということになるが、どのように分割するかはやはり書き手が定めなくてはならない。

人文科学系論文では、先行研究の概観などにこの技法が利用される。この場合、先行研究のどの点についてまとめるのかという目的の問題から始まって、先行研究をどのように分割するか（論者ごとか、論点ごとかなど）、どのように配列するか（時系列によるか、肯定／反論をそれぞれまとめるかなど）にいたるまで、全てが書き手の決定にゆだねられる。

Ⅴ. 過程説明を目的とした段落の話題文

描写の場合と同様、「この製品の使用法は以下の通りだ」といった文も話題文となりうる。

しかし、単純な過程説明であっても、例えば「この機関の動作は四つのステップからなっている」など、その後の説明を把握しやすくする話題文が作れれば、読み手にはより分かりやすい。

また、先行研究概観の場合は、例えば「カントの理性批判に対しては、大きく分けて二つの反応が見られた」など、書き手の「捉え方」をより明確に示す必要がある。多くの場合、「先

行研究全て」をまとめることは不可能であって、必然的に書き手の「選択」が働くことになるからである。

VI. 出来事を説明する

これは通例「語り」と呼ばれる。この場合も、ある出来事をなぜ語るか、目的の設定が重要である。

続いて、目的を達成するためには出来事をどのように分割する（より厳密には、出来事を構成する小出来事のうちのどれを語る）のが効果的かを考える。

さらに、これをどのように配列するのが最も効果的かを考慮する。通常、これは時系列に従うことになるが、出来事説明の場合は、過程説明よりもさらに配列の自由度が高い。例えば効果の点から考えて、出来事の結末部分を一番最初に持ってくるなどというのは常套手段である。

拠ってたつ「事実」（伝記や作品）があるために、ややもすると長々と書きがちだが、本当に必要な長さであるか、厳密に考える必要がある。

VII. 出来事説明が必要とされる場面

人文科学系論文では、作者などの歴史上の人物の行動を示す際に用いられる。作者の人生の概略を述べるにせよ、ある作品の成立過程を述べるにせよ、なぜ論文のその時点で説明が必要なのか、どのポイントを読み手に示すべきなのか、どの順番で語るべきなのかは書き手にゆだねられる。

また、文学系論文の中では、取り扱っている作品の梗概を述べるのにも用いられる。ここでもまた、その段落（ひいては論文全体）の目的に応じて、採りあげるべきポイントは変わってくる。

VIII. 出来事説明を目的とした段落の話題文

描写や過程説明の場合と同様、「この作品の梗概は以下の通りである」といった文も話題文になりうる。

しかし、例えば「昨週、私は大変戸惑うような経験をした」「この作品で著者は、人間の悪というものを深くえぐりだしてみせている」など、出来事や作品を書き手の視点から一言でまとめた表現があると、読み手にとってはより分かりやすい。

IX. 課題

情景描写：「三田キャンパス」

過程描写：「日本の大学入試システム」

出来事描写：「人生でもっとも恐ろしかった思い出」